

NO. 33  
October '02

# newsletter

神戸女学院大学  
女性学  
インスティテュート

## 「女性論フォーラム」開場

上西 妙子

現在、「女性学インスティテュート」のメンバーは34名です。それは本学の全教員の約3分の1にしかすぎません。しかし、この組織の活動は多彩です。出版物としては研究誌を年1回、ニュースレターを年2回発行。講義は、学内向けの「女性学」（前・後期）と主に一般を対象とする「連続セミナー」（前期4回）を開講。加えて、公開講演会をアセンブリーアワー時に前・後期に1回ずつ開き、宝塚市の女性センターには講師を派遣しています。それぞれは、大学教育機関の活動としても神戸女学院大学の活動としても、大きな意義を持っていることが確信できます。

さらに多くの方々にメンバーとして参加していただくには、どうすればいいのでしょうか。

今までにも、より広い賛同を求めて、「女性学」という呼称に代えて「ジェンダー（社会的性差）研究」を採るという提案がなされました。しかし、「社会的性差」に焦点をあわせる研究は実際に、賛同されずにはいない一般性をもつのでしょうか。むしろ、そこで押し込められる曖昧なもの、つまりは「分かり切らないゆえにもっと「痛切な」個人的逸脱が、「妥当な」一致に置き換えられかねないのは残念です。

また、より普遍的な内容を求めて、いっそ「女・男・人間学」研究に改称することもあるのではと考えもしました。しかし、そのような漠然とした名称を持つ機関が、ことさら本学にあるべき意義は明確ではありません。結局、「女性学」の呼称には、いまのところもっとも可能性があると思えます。しかしそれはごく単純に、「女子大学」であるからそこに「女性学研究所」がある、ということの出発点であって欲しいと思います。

それは、啓蒙活動の姿勢を意識的にすてて、この場を自然な思索と討論の場とすること、つまり、限定された使命を帯びた組織とはむしろみなさないことだと思います。

「そこに今いる人たち」の全てが、当然のなりゆきとして「女性」をテーマに考える場としての「女性論フォーラム」が、ごく自然に開かれているということです。流行が作用する世間での論議を俯瞰しつつ、「感性」も「理性」も柔軟にして互いの声に耳を傾け、

岡田山の全員が不定の未来に向かって動いていくことができればと願います。

（女性学インスティテュートディレクター、文学部教授）

連続セミナー「アジアの女性とジェンダー」を担当して

【第1回：2002年6月7日】……………金沢謙太郎

### ●「9つの種子をまもる

ーヴァンダナ・シヴァのエコフェミニズムー

11年前、アジア女性学研究所の総会が本学で開催された。そのときの基調講演者がヴァンダナ・シヴァである。彼女は「種子と大地」というテーマで講演をしている。今回のセミナーでは、11年前の彼女の講演をもとに、種子をまもることがなぜ重要なのか、またどうやって種子をまもるのか、という問いかけから出発した。

エコフェミニズムは、もともと実践、運動から出てきた考え方であり、それに続いて理論、研究が備わってきた。運動家であり理論家でもあるシヴァに注目していた私は、1996年インドの彼女の自宅まで訪ねた。今回、そのときの写真や聞きとりテープのほか、彼女の著書やVTRの一部などをご紹介します。主なトピックは「チプロ運動」であり、「社会林業」や「緑の革命」に対する批判であり、「バイオパイルシー」への抗議であり、さらに「9つの種子をまもる運動」である。

現在、工業先進国によって途上国内の伝統的知識や種子の特許化・商品化が進められている。これによって、多国籍企業の自由は広がったものの、農民の自由は切りとられようとしている。インド在来の種子の多様性は、持続的農業の基盤である。と同時に、種子は大地を尊ぶ人びと、とりわけ地域の自然に通じた農村の女性たちの自由や平等、平和と分かちがたく結びついている。

セミナー後、多くの受講者の方々からご質問・コメントをいただいた。特に、自然の搾取と女性の支配を正当化した西欧家長制への批判についてご質問が重なった。私の説明、勉強が至らない点も大いに自覚させられた。今後もシヴァの展開するエコフェミニズムの実践と論理に学んでいきたい。

（人間科学部専任講師：環境社会学）

【第3回：2002年6月21日】……………松澤員子

●「日本植民地時代から

戦後を生きた台湾の女性たち」

今回のセミナーでは、私の長年にわたる台湾でのフィールドワークの聴き取り資料を中心に、50年にわたる日本の植民地時代、そして戦後蒋介石政権の下、家族の大黒柱として女性はどのように生きたのか、その課題をまとめてみたいと考えた。とりわけそれぞれの政権に反抗し、犠牲になった男性を陰で支え、その家族のくらしを支えてきた女性の姿に焦点を当てたかった。資料整理のための十分な時間が取れず、写真資料の提示もできなかったが、受講者のみなさんは熱心に聞いてくださった。いつしか私はフィールドで出会ったあの人、この人を想い浮かべながら、話してしまっていたのではないかと思う。

台湾人は日本人にとって身近な存在である。しかし、九州ほどの島に、今も10を越える異なる言語を母語とする民族が暮らす多言語・多文化社会であることを知る日本人はそう多くはない。さらに、漢民族が中国大陸南部から台湾に渡来したのは17世紀頃から。それ以来オランダやスペインの植民地、明朝、清朝の支配を受け、日本の植民地支配を経て、戦後大陸から敗退してきた蒋介石政府のもとでさまざまな政治的弾圧を受けてきたことを知る人も少ない。受講者の多くがそうした歴史的背景に深い関心を寄せてくださったようである。セミナー終了後には、たくさんのご質問をいただいた。そして、質問用紙には精神的に夫を支え、家族を支えて生きた女性のたくましく、積極的な生き方を学び、新たな台湾理解ができたという感想を書いていただいた。現在の台湾情勢を理解するための一助となったのであれば、私の大きな喜びである。

(院長・理事長：文化人類学)

【第4回：2002年6月28日】……………川村暁雄

●「人身売買

ーアジアの女性と日本の知られざる関係」

担当した回では、京都YWCA・APT編『人身売買と受入大国ニッポンーその実態と法的課題』（明石書店、2001年）を参考にしながら、日本向けの人身売買の実態と法的な課題を紹介した。講義の内容については同書を参照してもらおうとして、ここでは講義で触れなかったことを中心に感想を記したい。それは、ジェンダーと人身売買のかかわりである。

性的な搾取を目的とした人身売買は、経済・政治・法律の問題であると同時に、ジェンダーにもかかわる。

「買う性」として社会的に構築された男性と「売る性」として作られた女性の関係の問題という側面もあるからだ。しかしこの問題を解決するための法制度のあり方を考えるときには、ジェンダーの構築のされ方を中心に置くわけにはいかない。国家の権力装置でもある法律が人間の内面に関与することはできるかぎり避けなくてはならないからだ。法律は、特定のジェンダーのあり方を前提としないという意味で「ジェンダー・フリー」でなくてはなるまい。そしてジェンダー・フリーという立場からは、この問題に接近することは容易ではない。「どちらも買ってはならない」「どちらも買っていい」の両者とも正解となるからだ。

実践的にはなるべくジェンダーの関わらない「強制」「搾取」「監禁」「国境を越えた移動」などに焦点を絞った方が、おそらく解決の糸口は見えやすいとは思う。だが、そうした主張を明確にするためにも、ジェンダーとの関わりをもう少し整理するべきかもしれない、というのが今回の私の発見であった。

(文学部専任講師：国際関係論)

※なお、第2回(2002年6月14日)は西垣敬子氏(宝塚・アフガニスタン友好協会代表)に「アフガニスタンの女性たち」をテーマにご担当いただいた。

連続セミナー「アジアの女性とジェンダー」を受講して

……………西岡寿梨

「経済」が日本を取り込み、「人間らしさ」「自分らしさ」の思想が見えなくなっている。日本は経済至上主義のもと、科学によって発展し、科学のおかげで今があるという錯覚を起こしていた。科学や経済の役に立つ一面だけに注目してきたため、それらの生み出す被害や破壊に目をむけずにきたからだ。そして今、その弊害は人間の生を困難なものにしている。

この連続セミナーで拝聴した四つの講義もそれぞれの原因は「人間らしさ」「自分らしさ」の欠如ではないかと感じた。経済至上主義が環境を破壊し続け、肉体的・精神的弱者を作り出している。人間が自分らしく生きる思想が存在しない世界では、人は社会の思想を取り込みそれに従って生きるしかない。大切なのは、人間がありのまま生きていける「人間らしい」「自分らしい」思想であり、その思想のもとで作られなければならない環境である。(人間科学部4年生)

.....小路山裕紀

今回の神戸女学院大学女性学インスティテュート主催の連続セミナーは「アジアの女性とジェンダー」がテーマであった。インド・アフガニスタン・台湾の女性、人身売買によって闇の世界に住まざるをえない又は住むアジアの女性達が取り上げられた。

人身売買の講義では、未だに人身売買が存在し、その受け入れ大国として日本が挙げられるという実態を知り愕然とした。

特に共感を覚えたのは台湾の女性の講義だ。台湾の女性達のパワフルさを感じた。台湾の現代の若者は、男女とも同等の学歴を望んでおり、結果同じ競争社会に生きるパートナーへの思いやりが生じているという。そして、男女とも結婚しても仕事を続けるのは当然と考えている。ある1人の台湾の女性が日本の女性へのメッセージとして、「日本の女性はおとなしい。それではもったいない！ もう少しパワフルであってほしい。」と答えたそうだ。

今回の連続セミナーは、毎回違った女性達が取り上げられたが、共通点としてみな力強く生きているという事が挙げられる。私もまた、これからさらに自分らしくそしてパワフルに様々な事に取り組んでいこうと、背中をおされた気持ちになった。また機会があればぜひセミナーに参加したい。(人間科学部3回生)

.....藤原舞夏

まず、私はこの連続セミナーすべてに参加できたことをとても幸運に思います。4回のセミナーを通して「アジアの女性」「ジェンダー」について学びました。その結果、私はアジアの女性達の価値観を通して世間のしがらみを排した、人間としての「女性」というものを再考する機会を得ました。ともすれば女性の立場なんて低い方へ低い方へ追いやられがちですが、ただそれを看過してはいけけないのです。「女性」だからと甘えるのではなく「女性」だからこそ主義主張を通す。今や「女性」に対する社会も変化せざるをえない時代だと私は思います。また、アジアの女性を知っていくなかで共通しているのは“バイタリティー”の凄さ。どんな階級に生きていようがひとたび“家族”というものを背負うとどんな犠牲をも払ってしまう。その犠牲が時として悲しい手段になることもあるけれどそれでも「女」は頑張るのです。「アジアの女性」達はひ弱になりがちな現代人に「たくましさ」というものを思い起こさせてくれました。体を張って自分達の社会での存在意義を模索しながら新しい文化的・社会的性差を創り出すことが、これからさらに「女性」の立場というものへの関心を高め女性学というものが発展していくのではないのでしょうか。(文学部1回生)

## Women and Men:

### Some *Rich* Thoughts on Teaching (Poetry)

Kerstan Cohen

In assessing my course on *Contemporary American Poetry* for Spring of 2002, I turned to a relatively early essay by one of America's most distinguished poets, Adrienne Rich: "Taking Women Students Seriously" (*On Lies, Secrets and Silence*, Norton, 1979).

Among other questions, Rich addresses that of selecting appropriate texts for the classroom:

How do we, as women, teach women students a canon of literature which has consistently excluded or depreciated female experi-

ence, and which often expresses hostility to women and validates violence against us? (239-40)

When trying to figure out which poets to read during the semester, the same issue loomed large. With this difference, of course: I am not a woman, but a white man teaching at a Japanese women's university. As such, I felt a strong responsibility to resist dictating the reading, lest my own, male-white-skewed literary background propagate the problem that Rich had outlined. At the same time, the students had little background in contemporary, English-language poetry. How to get the reading on the table?

In the end, I divided the 70-student class into 16 groups, each of which independently selected one

poem from a reserve shelf (or from several American poetry Internet sites, including *the Academy of American Poets*). After practicing their own recorded reading, each group played and discussed it before the class. The course was labeled "Special Lecture," particularly "special" because the students, themselves, did most of the lecturing.

In the end, the students discussed predominantly women of diverse racial backgrounds. (One group chose a poem by the Japanese-American writer, Kyoko Mori, later discovering to their delight that she had also graduated from Kobe College). Certainly, the poetry they had perused to make their selections reflected some shifting toward diversity in

the canon since Rich wrote "Taking Women Seriously" in 1976. Granted, as co-editor for *The Best American Poetry 1996*, she noted that gender bias and "literary apartheid" were still strong and well, adding: "The [Best American] series has so far been guest-edited by six white men and three white women, including myself" (Scribner, 18).

But more important than the poems covered in this particular class was a fresh perspective I gained on that TESOL catchall: student empowerment. Specifically, empowering women students in the literature classroom is one crucial step in nudging the canon toward inclusion of those who actually do the reading and the writing. (文学部専任講師：英語)

## 『女と男』

### 「父」と「子育て」の関係

津 上 智 実

この夏、サムが離婚した。これを報じた日本経済新聞「春秋」欄の論調が何とも八つ当たりのだったのが印象的だった。安室の人気か、あるいはこの二人の社会的影響力の大きさを物語るものだろうか。

「育児をしない男を、父とは呼ばない」—1999年に当時の厚生省が少子化対策に打ち出したコピーは話題になった。ポスターにはサムと前年5月に生まれた息子の姿があった。どことなく脅迫めいて響くこのコピーを私は好きになれなかったが、確かにあれから世の中はじわりと大きく変わった。

東京都立小金井公園(私の東京の家の近く)の横に小さな水遊びプールがあって、夏には毎日幼児連れの親子で賑わう。ほんの数年前まで母と子で満ちていたこの小さな空間に、今、母の姿はない。休みの日には父と子の組み合わせで埋め尽くされる。ショート・パンツ姿の父たちがフラッカーズ・パパに子どもを乗せて次々とやってくる。JR中央線の中でもこの頃よく父と子(3、4歳の幼い子ども)のペアを見かける。寄り添う子の背中に回した手が自然でさりげない。日経「春秋」子の批判はもっぱらサムに向けら

れていて、厚生省のポスターにまでなったのこれから一体どうしてくれるといった調子だった。別にそんなに怒らなくてもと思う。子どもの親権はサムが取り、安室も親として子どもの成長に関わっていくという。父親も親権を取っていないだよというメッセージ性はあるし、離婚しても双方が親として子育ての責任を引き受けていくというのは結構新しいのではないだろうか。

家のために結婚した時代ならいざ知らず、自分の意思で決めた結婚なら離婚はいつでも「あり」だ。でもだからといって変えられない親子という事実。その責任と権利(子育ての権利)をどう実現するか、それぞれが真剣に考えればいい。「普通」で縛ると窮屈だ。

私の回りでも、弟は「育児」を理由に退社・独立したし、夫は東京で二人の息子(11歳と8歳)と大騒ぎの毎日を送っている。「お父さんが子育てするなんて」という時代は終わった。

(音楽学部教授：音楽学)

#### 2002年度女性学インスティテュート編集委員

川合真一郎、三杉圭子、三浦欽也、高橋雅人、上西妙子  
(委員長)(ABC順) 編集事務：豊福裕子

編集・発行：神戸女学院大学女性学インスティテュート

〒662-8505 西宮市岡田山4-1 TEL/FAX:(0798)51-8545

E-mail:gender@mail.kobe-c.ac.jp

[URL](http://www.kobe-c.ac.jp/gender/) http://www.kobe-c.ac.jp/gender/